

日光移動教室に8年ぶりに参加して

副校長 細井宏一



8年ぶりに、6年生の日光移動教室に参加した。久しぶりの奥日光は懐かしく、本校が定宿としている「湯ノ屋旅館」の白濁した温泉と硫黄のにおいは変わっておらず、嬉しかった。3泊4日で多くのことが心に残ったが、奥日光クロスカントリーですばらしい子供たちの姿に出会ったのでそのことを述べたい。

奥日光クロスカントリーは3日目に行われる。奥日光の大自然の中を、朝から夕方まで自分たちが計画したルートで歩き、大自然にたっぷり浸る取り組みである。朝8時、玄関前に集合。私の担当したグループは、旅館からバスで竜頭の滝まで移動してスタートする。コースは、竜頭の滝から中禅寺湖に出て千手が浜へ。そこから最も奥地の神秘的な湖「西ノ湖」に寄り、小田代ヶ原・湯滝を通過して、宿である湯ノ屋旅館に16時に戻ってくる7時間半を歩き通す計画のグループだった。なかなかのハードコースである。

教員は、基本的には後ろから付いていくだけ。子供たちに任せていく。どのようなクロスカントリーになるか、私は見守っていた。これまでの引率経験では、7時間もグループで一緒に歩くと、歩くペースが異なるので「休もうよ」「早くしろよ」がきっかけで児童同士がトラブルになる場面もあった。実はこういうことをどう乗り越えるかもこの取り組みのねらいの一つでもある。

しばらくするとやはりペースの違いが出てきた。どうするかと思っていたが、このグループは、リーダーシップとフェロウシップがすばらしかった。皆が自分のことだけでなく、相手のことを考えて言葉を掛けていた。リーダーの児童は、地図と時計を見ながらしっかりコースを歩いて行く。そして常に後ろを振り返り「大丈夫？休みたくなったら言ってね」と声をかけていた。特に感心したのは、休憩をとったときである。自分が休むだけでなく、グループの一人一人に声を掛けていた。更に後ろの方でペースが落ちている児童の所まで来て「大丈夫？次の峠まで歩いたら長く休憩とるから、がんばってね。」と話しかける。近くにいるサブリーダーの児童に「後ろの方頼むね」と声を掛ける。このリーダーの気配りに、チーム全員が信頼をよせてついていっているようだった。ちょっとペースが遅くなりがちだった児童も、最初は「疲れた」とこぼすこともあったが、途中からは「大丈夫、もうちょっと行けるよ」と自分を奮い立たせていた。私は「なんとすばらしい子供たちなんだろう」と感心し、後ろで一人心が暖かくなっていた。

更にすばらしかったのは、どっぷりと自然の中に浸る経験をしたことである。耳を澄ますと春ゼミの声、アカゲラのドラミング、鳥たちのさえずりが聞こえる。小田代ヶ原の白樺、松の樹液に気が付いたり、ゼミの姿や鳥を観察したりした。中禅寺湖の青く澄んだ水と真っ白な砂浜、そして神秘的な西ノ湖にも行くことができた。鹿には出逢えなかったが猿に出逢った。リーダーの児童は、時々「何か音が聞こえるよ」とメンバーに促し、その時は全員静かに歩いた。途中、大自然を感じる場面があると「ここきれい、写真撮っておいて！」と声があがりカメラ担当の児童が写真を撮っていた。中禅寺湖畔の砂浜に付いたときには、真っ白な砂浜にとっても盛り上がった。湖畔ではしゃいで遊ぶ。水を触る。みんなでジャンプした。自然を感じている姿であった。最後、湯ノ屋旅館に2分前に全員でゴール。達成感に溢れていた。

このクロスカントリーは3つのねらいがある。①長い時間を歩ききるという克服・達成感、②大自然に浸る体験、そして③チームワークの醸成である。この3つをまさに達成できたクロスカントリーで、体験的に学ぶこと、宿泊的行事の教育的意義を再確認することができた。

